

# 幼児期前期の言語発達

— 1 ~ 3 才 —



村 井 潤 一

幼児期前期（一〜三才）の言語発達過程は、乳児期における象徴機能の形成過程とは別の意味で非常に重要、かつ研究方法に困難を伴なう過程である。

## 〔本時期の言語発達の一般的特徴〕

一、一般的に幼児は一才前後には数語の有意味語しか持たないのが普通であるが、三才になると語彙の増大とともに、ほぼ基本的な文法形式を用いて会話ができるようになる。また、音声的にも、ほぼその国の、あるいは民族の音韻体系の音声を使用することができるようになる。すなわち、音声言語によって自分自身の欲求、要求を表現し、相手にそれを伝達、理解させることが可能になるのである。このことは、幼児が完全にナンバンジレベルより離脱したことを示すとともに、彼が属する文化圏の文化様式が彼の心の中に深く影響をもたらしていることを示すといえる。

二、このように言語の学習が可能になることの基盤には、幼児の思考機能、象徴機能の発達が当然存在する。さらに、この言語の獲得が、外界を概念的に把握する思考機能の発達を促進することもまた、疑いを入れない事実である。

三、言語を獲得することにより、とくにおとなとの関係において彼の知識は飛躍的に増大するとともに、人間関係は円滑になり、社

会化は助長され、社会適応の能力は著しく増大する。

四、本時期の言語発達において、とくにその出現時期は個人差が著しい。子どもによっては、後の言語発達、知的発達に特別な関係なしに三才位まで数語しか発しない場合がある。意識的に幼児語を使用せずに子どもを育てた場合、また、わずかな情緒的障害を一、二才の時に受けた場合、このような遅れが見られることが多い。真の言語障害とこれとを区別することは、かなり困難であり、その差異は、言語発達だけではなく一般的な行動発達の関係の中で捉えられねばならない。

#### 〔本時期研究の問題点〕

言語機能の形成過程の中で、彼らの言語は、形式においても内容においても極めて変化が著しく、しかも両者が完全に平行しているとは考えられないこと、またそれは、具体的、感情的であり、状況限定性が極めて強いこと、先述の如く個人差が著しいことなどは、この期の研究の隘路となっている。

#### 〔音声の発達〕

乳児は喃語期に一部の摩擦音系統の音を除いてほとんどの母音

様、子音様発声を行なうことが可能であった。しかし、幼児期になって、彼らがそれをコミュニケーションの手段として、自発的、有意味的に発声するばあい、そこに別の困難性が生ずる。

中島らは、日本語の音韻を、幼児ができるだけ知っている単語、一〇一語の中に含めるよう工夫された音声発達テスト(仮称)を作成し、幼児がそのテスト状況で、自発的、あるいは模倣的に発せられる音声(イ)例、サルの絵にチャウと発音するとチャ、ウ、と数える)と、正しい場所で正しく発せられる音声(ロ)例・サルの絵にサルと発音した時のみ数える)の二つの点から音声の発達過程を分析している。

一、母音(う[w]、お[o]、あ[a]、え[e]、い[i])

(ロ)ほぼ一才初期に充分調音化して発声することが可能である。

(イ)一才後期から二才にかけて正しく発声することが可能である。

二、拗音(ゆ、よ、や[j]、わ[w])

(イ)拗音様の音は、喃語期によく見られる。[w]の音は比較的早く調音されているが、[j]の音はテスト語に適當なものがないことなどから出現は遅れて二才頃になる。

(ロ)(イ)の傾向と差はあまり大きくないが、やや遅れて出現する。

すなわち、[w]音は一才前半、[j]音は二才半ばに正しく調音されて用いられるようになる。

三、破裂音(く・こ・か・け・き・きゅ・きよ・きゃ・ぐ・ご)

・が・げ・ぎ・ぎゅ・ぎょ・ぎゃ〔g〕・ぶ・ぼ・べ・び・びゅ・  
びょ・びゃ〔p〕・ぶ・ぼ・べ・び・びゅ・びょ・びゃ〔b〕・と・た  
・て〔t〕・ど・だ・で〔d〕

〔4〕喃語期には調音機構は、両唇、歯茎、口蓋の順に発達し、調音部位はどこであろうとも、破裂音の基礎はできていると考えられる。この調査の結果では、調音部位の相違による通過率の差はほとんど認められなく、一才後半には、ほとんど調音されて発音されている。

〔5〕破裂音が正しく調音されるのは、〔4〕より遅れて二才末までかかり、また他種の調音の首節から分化するのは、両唇音〔b・p〕、口蓋音〔k・g〕、歯音または、歯茎音〔t・d〕の順である。

#### 四、破擦音〔ts〕、ち・ちゅ・ちよ・ちゃ〔tʃ〕

〔6〕破擦音のうち「ち、ちゅ、ちよ、ちゃ」は一才前半には現われる。これは、日本の幼児語には、この種の音節を含む擬音語が多く、他の音節と誤って発音されることが多いからである。ただし、「つ」は一才台では〔tʃ〕系音節よりも発音が困難である。

〔7〕一才後半になって、〔tʃ〕は正しく発音されるようになる。しかし、〔ts〕は二才の末になっても正しく発音できたのは、半分に満たない。

五、破擦音、または摩擦音〔ず・ぞ・ざ・ぜ〕〔z〕、じ・じゅ・じょ・じゃ〔ʒ〕

〔8〕日本語のざ行音は、破擦音〔dz〕でも摩擦音〔z〕でもよいことになっているが、幼児期には、ほとんど破擦音的になされている。「ず、ぞ、ざ、ぜ」は、一〜二才では発音困難なものが多いが、これはこの期には口蓋化されて「じゅ、じよ、じゃ、じえ」で代用される傾向が多いからと思われる。

〔9〕「じ、じゅ、じよ、じゃ」は、二才半よりほぼ半数の幼児が正しく発音できているが、「ず、ぞ、ざ、ぜ」は二才末になっても発音困難なものが多い。

六、摩擦音〔す・そ・さ・せ〕〔s〕、ふ〔f〕、ほ・は・へ〔h〕、し・しゅ・しょ・しゃ〔ʃ〕、ひ・ひゅ・ひよ・ひゃ〔ç〕

〔10〕この種の摩擦音では、喃語期にほとんど認められない〔f〕がたまたに見られる。〔s〕の音は、二才後半でやっと半数の者が調音できるのみである。〔h〕、〔f〕、〔ç〕の摩擦音は、喃語期にもよく認められる。二才になれば、自発的に多くの者が発音可能になる。

〔11〕〔f〕は、二才末では半数の者が、正しく発音できるが、〔s〕は、二才末でも極くわずかの者しか正しく発音できない。〔f〕、〔h〕、〔ç〕は〔f〕とほぼ同じ傾向を示し、正しく発音できたものは二才末で半数である。

#### 七、弾音〔る・ろ・れ・り・りゅ・りよ・りゃ〕〔r〕

〔12〕一才末では、拗音と結合するもの以外は過半数の音が発音可能である。

(回)正しい発音のできたものは、二才末で約半数である。

八、鼻音(む・も・ま・め・み・みゆ・みよ・みや[m]、ぬ・の・な・ね[n]、に・にゅ・にょ・にゃ[p]く・こ・か・け・き・きゅ・きよ・きゃ[ɥ])

(f) [m]、[n]、[ɥ]の調音機構は、それぞれ[b]、[d]、[g]、のそれと同様であり、前者は鼻腔をも調音器官として使用するという点が異なるのみである。したがって、破裂音とほぼ同様の発達傾向が認められる。ただし関西では、[ɥ]は音素として認められない([g]で代用される)。(この調査が関西で行なわれた関係上、ほとんど認められない)。

(m) [m]音節は[p]、[b]音節とほぼ同様の傾向を示し、[mj]音節以外は、二才始めに体制化されるが、二才末でも完全ではない。[n]、[p]音節も、ほぼこれと同様の傾向を示し、[r]、[d]音節のそれと少し異なるようである。

### 〔語彙の発達〕

幼児は、一才前後に幾つかの有意味語の発音を発し、母親によつては、子どものこの発音の全てを有意味語として理解しているばかりが多い。しかし、この発音は、確実に有意味であっても極めて状況に限定されて発せられるものであり、また聴取する方も、この発

音を状況と分離するとかかなり理解困難になってしまうのである。しかし、この困難性は、発達とともに減少し、早い子どもでは一才末に、その量、内容はともかく一般社会に通用する社会的言語を使用しうるようになる。

このように子どもの持つ語彙が初期の有意味音の段階から社会的言語の段階へ発達するのは、(1)発音の発達(例 チャウ↓サル)、(2)幼児語から成人語(例 ワンワン↓イス)、(3)幼児独自の命名から社会的言語(例、ハッピー↓キシヤ、猫をワンワン、猫をネコ)、(4)幼児独自の概念から社会的概念(例、特定の犬のみをイス↓犬一般をイス)といった過程をとおしてである。

幼児の語彙は一才から三才までの間に極めて顕著に増大する。この語彙の増大に関しては、研究者により異なった結果がでているが、この差は研究方法の差に帰せられることが多い。その増加の例として、スミスのものをあげておく。

年齢	M. E. Smith		
	人数	語数	増加
0; 8	13	0	—
0; 10	17	1	1
1; 0	52	3	2
1; 3	19	19	16
1; 6	14	22	3
1; 9	14	118	96
2; 0	25	272	154
2; 6	14	446	174
3; 0	20	896	450
3; 6	26	1222	326
4; 0	26	1540	318

語彙増加表

## 一、語彙の急激な増大の理由とその意味

(1) 幼児期初期から彼の活動範囲も拡大し、彼の前には常に多くの新しい事象が生ずるようになる。幼児は、これらに対して新しい興味や疑問を持ち積極的に質問するようになる。なに「どこ」「だれ」などの質問が二才前半に現われる。「いつ」「なぜ」などの質問はやや遅れて三才頃に現われる。このような活動の中で、物あるいは状態と音声との対応を理解しようとする気持が芽生え、やがて物あるいは状態が音声的表現で表わされるといえる。たどえば、子どもが海辺に遊びに行くという新しい経験をしたとき、新しい経験を音声的に表現しようとして、急激に語彙が増加したと報告している学者もいる。

この語彙の増大は単に量的な増大を示すばかりでなく、幼児が持っている概括機能を言語的に再整理し、語彙間の関係性を生みみだすのである。そして、その結果、それが文となって思想の表現の手段として発展していくといえる。

(2) 子どもの発達過程において、新しい行動を学習すると、それを積極的に使おうとする傾向が見られる。ゆえに音声の象徴的な使用という機能を獲得した幼児は、それを盛んに使用してみることは、当然考えられる。ゆえに、彼にとって未知なものばかりではなく、充分知っているものにまで質問する事実も、この点から理触できる。

(3) このように既知のものにまで質問することの今一つの理由としては、親に自分を受容してもらいたい、すなわち、親との情緒的結合を強めたいという気持が働いているからである。しかも、その結果、何度にもわたる質問の中で音声と物あるいは状態との関係が確認され、より確実なものとして形成されていく。

(4) 養育者は、幼児のことばの発達を一歳頃から期待し、意識的、無意識的に言語活動を活発にするようにし始める。絵本を与えたりお話をしたり、幼児のうるさい位の質問にもいいねいに答えてやったりすることが、ごく普通に見られ、これが幼児の言語獲得に促進的な働きを示すことは確実である。

## 二、語彙の発達の形式と内容

### (1) 文法的発達

語彙の増大を文法的な形式より分類したシテルンの結果によるとほぼ次のようである。

名詞（一〇か月半）、感動詞（一一か月）、動詞（一歳三か月）、副詞と接続詞（一歳八か月）、形容詞と数詞（一歳九か月）、代名詞（一歳一〇か月）の順である。そして、全発語中の名詞の割合が、初期には一〇〇%であったのが二歳頃には六〇%になり、三歳で五〇%となり、その後あまり変化しない。また、一歳の前半に現れ出す動詞は、二歳で二〇%になり、これも以後それ程変らないという傾向を示し、三歳頃からほぼ安定した文型によって会話ができるように

なる。

さらに、これらの品詞の発達のうち、主なるものを内容的に分析した諸研究結果を総合すると次のごとくである。

①名詞 初期の名詞は、飲食物、自己の身体、動物に関する語、すなわち、自分自身と自分自身をとりまく狭い世界のものが中心である。それが年令とともに社会的な事項、あるいは彼自身の生活とは直接関係のない、いわゆる知識のための知識といったものが増大する。

②動詞 多くの研究者は、幼児の初期の動詞が現在形をとることが多いと述べている。しかし、日本人の子どもでは、過去形を用いるのがかなり早くから見られることもある。たとえば、絵本をめくって、好きな動物をみて「あった」というばあいがそれである。

ただ、このばあい、過去の事実を表わしているのではなく、現在の事実を指示しているといえ、文法形式と幼児の心性のくいちがいを示す例といえる。動詞の活用の発達は、非常に早く、三歳頃には、能動、受動、過去、現在、未来、可能、命令、その他あらゆる様態を表現することが可能になる。しかし、幼児の心性が同じ程度に分化しているか否かは検討される必要がある。

③形容詞 初期の形容詞は、極めて主観的、感情的な色彩を帯びている。しかもその感情性の両極性は著しい。たとえば、大きい、小さい、熱い、冷たい、などは、最初に学習容易な形容詞であり、

しかもこの熱いは御飯が熱いこと、冷たいは水が冷たいことなど具体的なものゝの表現である場合が多い。

④副詞 量の副詞、場所の副詞に対して時間の副詞はかなり遅れて出現し、しかもその使用には、かなり誤用が多い。これは時間概念が空間概念より、相対的、抽象的色彩が強く、彼の心性の発達水準に依存しているといえよう。

#### (2) 機能的発達

先述の分類は、いわゆる規範文法によるものであって、これは必ずしも幼児の言語発達の機能的な局面と一致しない。もちろん、この文法的な発達の背後には、十分、機能的発達が伺える点もある。たとえば、接統詞の発達は関係把握の発達と無関係でない。しかし、幼児期の言語の機能も概念内容もおとなのそれと著しく異なる。たとえば、「おかあちゃん」「マンマ」などは、文法的には名詞となるが、あるばあいには動詞的に用いられる。さらに言えば、名詞と動詞の未分化型といえよう。ゆえに、幼児期の言語のばあい、文法形式による分類には、ある種の疑問が残ることは当然であり、機能的な局面からの分析が要請される。

#### ① 対象指示語と状態指示語

規範文法の上から言うならば、幼児の語彙は名詞から動詞の順序で出現する。これは、対象指示から状態指示の順といえようが、幼児の心的機能の発達、あるいは言語が用いられる状況との関連性を

問題にする時、この順序に疑問が生ずる。たとえば、「ワンワン」は、犬に対する対象指示語になるが、ほえているという状態指示語にもある。このように、対象指示と考えられる名詞も状態指示的要素を含むものであり、両者は用いられる文法形式とほとんど関係を持たないか、あるいは両者が未分化な形で存在するからである。これら両者が分化して、言語的に使い分けられていく過程が、文への発展の過程といえよう。この分化の過程について二・三の例を示してみる。

(i) 動作の援用

A児は一歳八か月の時、神社の前で「マンマ・アン」といって頭を下げる習慣がついたが、このばあい必ず「アン」のところで頭を下げる動作が用いられている。「マンマ」と「アン」とは、一方が対象指示語へ、もう一方が状態指示語へ向かうと考えられるが、状態指示の方に動作が援用されていることは、分化を助けているといえる。

(ii) 状況による使いわけ

B児は一歳一〇か月の時、絵本でお母さんが立っている絵を見つけると「カーチャン」という。しかし、お母さんが寝ている絵を見ると「ネンネ」という。すなわち、同一対象が状況によって対象指示語が用いられたり状態指示語が用いられたりしているが、両者に未だ明確な関係がない。

(iii) 系列的提示による効果

B児は二歳の時、立っているお母さんの絵を見て「カーチャン」と

いい、「何しているの！」という質問には「タッチ」と答えられない。ところが寝ている絵を見て「ネンネ」という。もう一度立っている絵を見せると「タッチ」という。これは前の状態指示的表現が後の答に影響を与えたと示しているが、未だ「カーチャン、タッチ」という完全な分化には到っていない。

(iv) 非現前事象の表示

幼児の心的活動の発達とともに、彼の思考は現前の事態によって規制されることが少なくなる。このことから、過去未来の事象を言語的に表現することが可能になる。これは文法的には時制の変化によって表わされるが、機能的には時制の変化の出現以前に十分行なわれうる。ピューラーの報告によれば、一歳半の幼児が、以前見た兵隊の行進を「兵隊さん、ラララ」と表現したとある。このような現前していない事象、言いかえれば話し手と聞き手とに共通の基盤のない事象を言語手段を通して伝達することは、言語の最も重要な機能の一つと言えよう。そして、この非現前事象を確実に伝達するためにこそ複雑な文型を学習する必要があるともいえる。

(v) 会話の発生

自分自身の要求、経験、思想などを相手に伝達するだけでは会話にならない。相手のそれらを理解して、言語的に応答するところに会話の基本的な形式が見られる。この応答は、乳児期から発達してきた言語を理解する機能と言語を発する機能との結合と考えられ

る。会話の発生を何に求めるか。乳児期の音声模倣は一種の音声的  
応答であるが、そこに意味上の伝達はない。また、乳児期の言語理解  
は意味的な応答であるが、その応答は動作によってなされる。ゆえ  
に、会話の発生の基礎は、一歳初期によく見られる。「お父さんは！」  
に対して「カイシャ」また、「電車は！」に対して「チンチン」とい  
った質問と解答が選択を許さぬ筋道の上に形成されたものに求めら  
れるであらう。幼児期初期には、このような会話の形式の学習が盛  
んである。たとえば、「お父ちゃんは好きか」に対して「ハイ」、「嫌  
いか！」に対して「ハイ」と答える事実、あるいは自分で質問し  
て自分で答える事実、いずれも会話形式の学習の過程といえる。こ  
のような過程を通してやがて幼児は、相手の話しかけに対して適切  
な言語的反應様式を持つようになる。そのためには、相手の立場や  
考え方を理解する能力の発達が必要であることはいうまでもない。  
(ただ、幼児期前期の会話は、おとなを相手にするものが多く、ゆえ  
に、おとなの側が定まった答を期待してなされるばあいが多い。)

### 〔文の発達〕

以上述べてきたことから、初期のことばは、それがたとえ一語で  
あっても文の機能を持って使用されているといえる。すなわち、一  
語文でも十分会話は成立する。しかし、幼児の精神機能が発達する

につれて、一語文では彼の心性が表現できなくなる。また、おとな  
から多くの長い文章のことばが幼児に理解されるよう迫ってくる。  
ゆえに、幼児は、一語文から二語文へ、さらに諸種の文型を用いる  
ようになる。

この文の発達過程についてシュテルンは、一歳までの準備期に次  
ぐものとして次の四つの時期を挙げている。

第一期(一歳～一歳半) 一語文が多く、その内容は擬声語、擬  
態語、感動詞がほとんどである。また、発音は喃語様発声で不明確  
なものが多い。

第二期(一歳半～二歳) 物に名があることを知り、物の名を聞  
く質問行動も多く見られる。文は、二語文が多くなり多語文も出現  
する。

第三期(二歳～二歳半) 語の変化、活用が活発になり、文の種  
類も多様化する(感動文、陳述文、疑問文)。文の組み合わせも出現  
するが、ほとんど並列法である。

第四期(二歳半～三歳) 並列法から従属法が可能になり、また  
幼児は既知の語から新語を生み出すことも見られる。

一語文から二語文に発達する時、全体的ハターンが分節化するの  
か、あるいは二つの語(文)が結合して二語文を形成するのかわか  
らぬ問題が生ずる。「マンマ、チョーダイ」といった二語文のばあいは、  
少なくとも機能的には「マンマ」という一語文から分節したと考え



られる。一方「オミカン、ネンネ」(ミカン  
を食べて寝ること)は明らかに二つの語  
(文)の結合であり、二つの過程が共存す  
ると考えてよいであろう。

幼児の二語の並置には、いくつかの型があ  
げられる。

(1)二つの事象の並置「オミカン、ネンネ」  
(2)関係ある二語の結合「ミカン、チョーダ  
イ」、「カーチャン、オカシ」

一語文の時期は、かなり長いが、この二語  
文の時期はそれに比して短く、三語文の時期  
はより短い。幼児はこのようにして多語文の  
時期に入る。

この頃から、文の結合も可能になる。た  
だ、初期の文の結合は並列文であり、これ先  
述の二語の並置(1)と機能的には同じもの  
であらう。この並列文の時期はかなり長く続  
く。これは、この期の幼児の心性が時間的流  
れに依存しているからである。しかし、二歳  
から三歳になると従属文を含めて各種の文型  
の発達が見られる。牛島らの研究によれば、

文章の長さの発達、文章の数の発達、従属文  
の発達(からの使用)のいずれを見ても、三  
歳が一つの頂点をなしているものであり、言語  
発達の見地から一つの転換期を示しているとい  
える。

(びわこ学園研究部)

参考文献

1. Mc Carthy, D. Language development in children. In Garnicael, L. (ed.), *Manual of child Psychology* (2nd ed.). Wiley, 1954, 492—630.
2. Mowrer, O.H. The psychologist looks at language. *Amer. psychologist*, 1954, 9, 660—694.
3. Murai, J. The Sounds of Infants. Their phonemization and symbolization. *Studia Phonologica* 1963/1964, 17—34.
4. 村田孝次 発達初期における談話の機能(1)——その縦断的事例研究——人文研究 一九六〇、一一、四・二八七—三一七
5. 中島誠(他) 音声の記号化ならびに体制化過程に関する研究(1) 心理学評論、一九六二、六、一—四八
6. Stern, C. U. Stern, W. Die Kindersprache. 4(Aufl.) Barth, 1928.
7. 牛島義友、森脇要 幼児の言語発達 愛育研究所教養部紀要、第二輯、一九四三
8. 矢田部達郎 児童の言語 創元社、一九五七

幼児の教育 第六十四巻 第四号

4月号 © 定価六〇円

昭和四十年三月二十五日 印刷  
昭和四十年四月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館  
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします。